

茶の湯文化学会会報 No.48

第48号 / 2006年3月28日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

小石元瑞と茶の湯

影山純夫

江戸時代後期に活躍した京都の医師小石元瑞と茶の湯の関わりについて、紹介したいと思います。

小石元瑞の本業は医師であり、多くの弟子を育てた医学教師であったのですが、煎茶を楽しむ、漢詩を詠み、書もよくする江戸時代後期を代表する文人の一人でもありました。その交友は、頼山陽、篠崎小竹、田能村竹田、中林竹洞、山本梅逸、浦上春琴、末広雲華、青木木米など、当時の高名な文人達に及び、京都の文人サークルの中心人物であったとさえいえるようです。

元瑞は当然のことながら文人サークルの楽しみである煎茶には深く関わり、煎茶道具も集め、煎茶に関するいくつかの記録も残しています。その内の『品茶記』は小川後楽氏によって紹介されているので、ご存じの方もおられるでしょう。このように煎茶人としての元瑞は紹介されているのですが、茶の湯についてもかなり勉強したことはほとんど知られていないようです。

現在元瑞の遺品類は究理堂文庫に保管されていますが、その中には数点の茶の湯書も含まれています。その内の二点について紹介しておきましょう。

一点は『茶道小免八箇条私記』と題されるもので、堀内宜翁が口述した内容を下村謙斎が筆記し元瑞が刪

訂しています。刪訂というのですから元瑞が文章を直したのでしょう。内容は、長緒や仕組点など千家流では小習と呼んでいる手前を記していますが、筆記者は謙斎であったとしても元瑞が小習を勉強するために身近に置いておいたと考えられます。堀内宜翁は堀内家四代方合斎宗心のこと、高槻藩の茶頭を勤めました。堀内家と小石家はともに釜座の通りにあり近かったことから付き合いができたようです。

もう一点は『櫻園茶嬉隨筆』で、三冊からなっています。第一冊は「書号」と題されるもので、元瑞の茶会記です。文化五年の十一月十九日の大徳寺孤篷庵寶海宗峻の茶会に始まり、天保三年十一月十五日の山中善右衛門の茶会に終わっています。特に目立つのは堀内家長生庵での茶会が多いことで、亭主は宜翁やその子不識斎宗完が勤めています。その中には、宜翁七十歳の賀の茶会や宜翁十三回忌の茶会などが含まれています。

なお、巻頭の寶海の茶会は、忘筌を待合に使い直入軒を本席に使っています。床には近衛應山の書を掛けていますが、焼失した孤篷庵の再建に尽くした寶海と援助者であった近衛家のことを考えるとなかなか興味

深い茶会といえるでしょう。

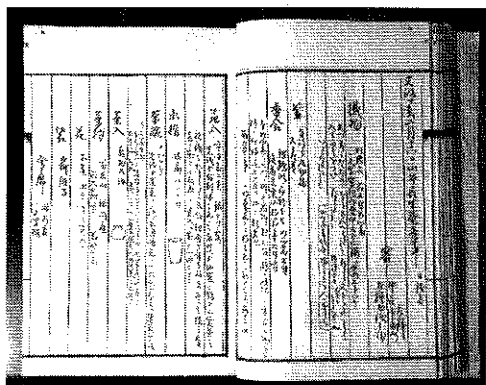
第二冊は「礼号」と題されるもので、珠光や利休に関する資料を写しています。織部の書いた利休の会記なども含まれておりこれも興味深いものですが、今後十分に検討を加える必要があるでしょう。

第三冊は「楽号」と題されるもので、手前についてかなり詳しく記しています。元瑞が茶の湯について本格的に学んでいたことがわかります。

究理堂文庫には『茶道具私覚』という書も遺されており、これは明治の早い頃に茶道具を処分した時の覚えのようなのですが、これによって元瑞の時代にあった茶の湯道具を知ることが出来ます。それによれば、茶碗では半使茶碗や伊羅保茶碗、一入茶碗などがあり、如心斎尺八花入、不白茶杓などもあったことになりす。道具から見てもやはり元瑞の茶の湯は本格的であったといえそうです。

以上のように見てくると、元瑞においては煎茶と茶の湯(抹茶)は何の問題もなく共存していたように感じられます。煎茶をよくした田能村竹田においてもこの両者は共存していましたし、以前に紹介したことのある近藤芳樹という江戸時代後期の学者においてもこ

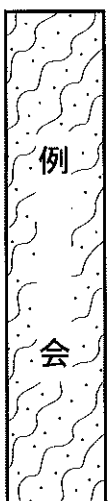
の両者は共存していました。煎茶と茶の湯は、近いようで遠く、遠いようで近いようです。



煎茶史料の発掘により、まだまだ見方は変わってくるでしょう。



本年度第三回目の理事会を、二月十七日(土)午後二時から、幹事を含めた拡大理事会として、池坊短期大学において開催した。倉澤会長の挨拶の後、議事に入った。すでに実施済みの事業についての報告の後、日本学術会議について、二〇〇五年一月より新



体制になり、登録学術団体の制度が廃止され、協力学術研究団体の制度が新たに設けられたので、本学会も協力学術研究団体となるための参加申し込みを行ったとの報告が倉澤会長から、一月二十六日・二十七日に開催された本学会後援の茶学の会シンポジウムの詳細が小泊副会長から報告された。続いて審議に入り、平成一八年度大会・総会について、二日に分けて開催しても参加者が少ないおそれがあるので、五月二〇日(土)一日で開催することが提案された。また、企画案が田中理事から説明があり、基本的にはこの案で計画を進めることが決定された。名称は「大会・総会」をやめて「大会」とすることになった。また、東京例会の一八年度案が了承され、会員名簿を新しく作成することも決定した。その後懇談に入り、会誌や役員の見出し方法などについて話し合われた。

東京例会

(平成一六年九月二五日)

『三菱・岩崎家の茶道具―父子二代収集の至

室―展によせて

長谷川祥子

岩崎家で刀剣と並んで早くから収集されたのが茶道具で、有名な「付藻茄子」「松本茄子」を彌之助が購入したのは、明治九年のことであった。それに続き明治二十一年に「利休物相茶入」「樋口肩衝茶入」などの伊達家の茶道具を購入し、さらに明治二十四年「猿曳棚」など三点を伊達家の茶頭清水家から購入している。

大正から昭和二〇年にかけて小彌太が収集した茶道具については、入手記録が無く不明な点が多いが、この時期多くの中国陶磁を購入している。小彌太の陶磁器収集は世界的な視座に立った系統的なもので、稲葉家伝来の「曜変天目茶碗」や藤田家伝来の「油滴天目茶碗」、鴻池家伝来の「青磁浮牡丹文太鼓胴水指」などを手に入れている。

彌之助と小彌太の収集の差異は、世相や時代の変化にもなう道具・文物の異動や流通の変容によるところもあるが、むしろ「茶の湯」に対する姿勢の違いによるといえる。彌之助が茶の湯を稽古したり茶会を催したりした記録は残されておらず、茶の湯の実践とは距離を置いたのに対し、小彌太は茶の湯

の稽古をし箱根・熱海・京都の別邸や東京島居坂・高輪・玉川の邸宅に茶室を営むなど茶

の湯に積極的にかかわった。小彌太が茶の湯に傾倒していったのは関東大震災後で、久田家の無適齋宗也や表千家の惺齋宗左に学んでいる。

父彌之助がその美術品収集を茶購入によって拓き、その嗣子小彌太は「三菱」筆頭にあつた生涯の終わりに「茶の湯」に心を安んじたのであろう。

宗易形ノ茶碗とは―利休の創作―

大前貴俊

『松屋久政茶会記』の天正一四年一〇月一三日の朝の茶会記録に出てくる「宗易形ノ茶ワン」については様々な議論がある。

天正一四年までに使用された茶碗は、主に唐物や高麗物で、瀬戸・信楽・備前といった和物も含まれる。樂茶碗と考えられる「今やき茶碗」や「今焼黒茶碗」などの使用は天正一四年以降である。また利休の使用茶碗を見ると、天目・珠光茶碗、高麗茶碗、建盞、瀬戸天目、井戸茶碗、それに「黒茶碗」で、「黒茶碗」の使用は天正一四年である。「一壘半敷」茶室が作られたのが聚楽第竣

工の天正一四年で、ここから茶道具が変わる。

また『山上宗二記』(天正一六年)に「當世ハ高麗、瀬戸、今焼ノ茶碗迄也、形サへ能候へハ数寄道具也」とあるので、「宗易形」は「樂茶碗」と比定される。

利休の「樂茶碗」の形は、「勾当」などの井戸・熊川形、「大黒」などの三島桶・黄瀬戸(道陳所持)形、「俊寛」などの歪み形、「無一物」「東陽坊」などの腰高で高台際から腰までの傾斜がかなりある特殊形に分けられるが、この特殊形以外は写しであり、この形のみ利休の創作で、「宗易形」に比定される。

「早船」の添状は、この「宗易形」が天正一四年または一五年頃、諸大名の垂涎的だったこと、さらに『江岑宗左茶書』によると「早舟ノ茶わん、駿河と申人オ工焼」とあり、「樂茶碗」が、長次郎とは限らず、「細工焼」として作られ、需要があったことがわかる。

これらのことから、久政が一度だけ「宗易形」と言及したのは、天正一四年頃、和物の「樂茶碗」として利休が創作し、長次郎以外の工人も作るほど流行した特定の「形」が成り立っていたからであろう。したがって、「宗易形ノ茶ワン」とは、「早船・東陽坊・一文

字・無一物・木守」形に比定される。

(平成一七年二月二六日)

伝徽宗皇帝筆『鴨図』のカモについて

―バードウォッチャーの見方から―

下坂玉起

五島美術館蔵の伝徽宗皇帝筆『鴨図』のカモは、トモエガモの繁殖期のオスに非常に似ているが、識別ポイントの顔の巴文が見られない。しかし、顔の部分は布の痛みが激しく、絵の具が剥落したために補筆・補色された可能性が高い。科学的な分析が加えられ元の色が判明することを期待している。

カモのポーズは、羽繕いをしているもので、カモはよく羽繕いをする。求愛時や交尾の後にもよく行う。この絵はメスガモの絵と対であり、そのことを作者は考えていた可能性がある。目も羽繕いの時の様子を示しているのかもしれない。

このように、この絵はカモの生態をかなり正確に写している。生きたカモを見たり、死んだカモを手元に置いて観察して描いたのだろうか。

すでに印などの研究から、この絵は徽宗ではなく南宋の画院画家の作と推測されている。

トモエガモは主に水田地帯で越冬するので、淮水以南で越冬する可能性が高い。徽宗が住んでいた北宋の汴京は淮水以北なので、通過地点のようだ。越冬地点である南宋のほうも、通過地点の北宋に在る徽宗より野生のトモエガモを捕獲したり観察したりしやすいと思われる。もちろん飼育下のカモであれば、生態分布とは無関係だ。実際徽宗はたくさん鳥を飼育していたそうなので、それを見て描いた可能性も捨てがたい。生態情報からは、徽宗よりも南宋の人の方が描きやすかったかもしれない。

この絵は現在から見ても、生態をかなり正確に表現しており、非常にバランスがよく、立派な写生画といつてよいだろう。

定家の筆跡研究の現在

名児耶明

藤原定家の筆跡については、飯尾宗祇が定家の色紙を手に入れたという伝えがあり、三条西実隆の「実隆公記」にも記載がある。そして、「宗久茶湯日記」に「小倉色紙」と思われる色紙の記載があり、以後「小倉色紙」が登場してくる。

定家の特徴ある筆跡が、室町時代後半から

尊重されだしたことは事実で、定家の子孫の冷泉家七代為和、九代為満が定家様の書を遺し、以後江戸次代初期には広い分野に定家様の筆跡が広まっていたことがわかっている。

ところで、定家時代の定家の筆跡は、すべてが定家のものかというところではなく、定家の周辺の人々も定家様の書を書いていたり、それが証明されており、今まで定家真筆とされていた写本でさえ、定家周辺の人物の筆跡とされるほど研究は進んでいる。それは、時雨亭文庫伝来の遺品が影印本として刊行され、伝来作品との比較が可能になったからである。

以前に五島美術館で開催した「定家様」展以来、「定家様」という言葉が定着してきたが、「定家様」については、定家の五〇歳代後半から六〇歳代にかけて晴れの場でも曇りの場でも定家様になることを推測し、定家の筆跡の変遷を述べてきたが、「明月記」展以降考えを修正する必要があるのではないかと思いついて始めている。伝存の「明月記」の自筆部分の特定、和歌集の書写での定家の係わり方、若書定家様などを綿密に検討する必要がある。

「小倉色紙」についても、多くの人が「百人一首」として見ているようだが、「明月記」の中で「百人一首」といつているわけではない。

く、「百人秀歌」との関わりで考える方が自然である。それ以外のものについても呼称と内容を吟味する必要がある。

(平成一七年四月二三日)

『大正名器鑑』の利用法

―紹鷗茄子・松本茄子などを例に―

田中秀隆

『大正名器鑑』の内容は多岐にわたるが、その構造を明らかにし利用に耐える部分と利用に注意を要する部分を明確にし、先人の遺産を有効に活用できる利用方法を探ってみた。

『大正名器鑑』は、実物大の写真、名称、重さを含めた寸法、内箱や外箱さらには添状まで含めた付属物、当該茶器が記載された文献の抜粋を載せた雑記、伝来、高橋審庵自身による実見記からなる。紹鷗茄子と松本茄子の伝来と雑記がどのように対応しているかを個別に検討すると、『大正名器鑑』の限界が明らかになる。特に雑記での引用文献については不明確な点も多いし、用いた文献の底本に問題があることもある。

『大正名器鑑』は名寄せ方式であり固有名称を欄外に朱書きしピックアップしていたので、

茄子のような一般名でのみ記された物についてはピックアップされない限界がある。しかし、こういった批判ができるのも審庵が文献を載せてくれた功績に他ならない。何よりも多くの茶道具を実際に手にとり見てきたことのできた審庵の実見記は、道具の見方を学ぶ上での先達となっており今日の茶道具観賞論の原点となっている。『大正名器鑑』の多様な構造を認識し、批判的に利用すべき伝来記述と、歴史的証言として尊重すべき実見記の記述とを分けて考える必要がある。

『山上宗二記』にみる銭屋宗訥について

生活と芸術研究会(宮田弘美・深谷信子)

銭屋宗訥は、堺市之町中浜に住んだ豪商で、

姓は松江、木庵と号した。名物道具を多数所持した茶人で、子の宗安は母のために南宗寺内に徳泉庵を建て、もう一人の子宗徳は清庵宗渭の句を鑄出させて作った茶飯釜を生涯愛玩した。

宗訥が所持した名物道具の内の四〇石茶壺は、織田信長・豊臣秀吉をへて徳川家に入ったと考えられるが現在所在が不明。圓照墨蹟は池田備中などをへて伊予久松家に伝わり現存する。則佑肩衝は誉田屋徳琳をへて近代

まで伝わったが現在その所在は不明である。宗訥は堺に限らず広い範囲の広い階層の人達と茶会を持った。堺埋蔵文化財センターの研究により宗訥の屋敷近くで銭が鑄造されていたこともわかり、銭屋の生業について推測することもできた。茶人との交友では、松井友閑と津田宗及との関係が注目される。宗及とは、一緒に奈良へ茶修行と名物めぐりのために出かけている。宗訥の茶湯の活動はこの旅をさかいに活発になる。

天正一六年山上宗二は、死を覚悟して高野山から奥州への旅に出る直前、宗訥が所持していた玉瀾の絵や墨蹟を書写するために堺を訪れる。宗二はどうしても宗訥の書き物を後生に伝えなかった。それから二年後の天正一八年二月、小田原城に籠城中の皆川山城守広照に懇望され、茶の湯の秘伝書に賛を加えた『瓢庵山上宗二筆記』を書き与える。同年四月八日、宗二は広照と同道して秀吉に投降するが、三日後に耳を鼻を削がれ惨殺されてしまう。しかし、宗二が死を賭して書写した銭屋宗訥の貴重な書き物は、現代まで大切に伝えられてきた。

近畿例会

(平成一七年二月二六日)

貞明皇后と秋泉亭

松本康隆

昭和五年、東京に大宮御所という貞明皇后のための住居が建てられ、その中に秋泉亭という茶室がつけられた。秋泉亭は私的な小さい部屋を求めた皇后の要求から、茶室の建築に結び付いたものであった。しかし、社交的な公務を行う場所としての役割も与えられた。

一方、明治に入ってから、天皇家の敷地内に初めて創られた茶室として、秋泉亭の建築は茶の湯の担い手が少なくなり、危機感をもって活動していた家元たちにとって一つのエポックであった。

家元たちにとっては国家の庇護のもと一定の地位が与えられ、その後も茶道人口を順調に増やすことが可能になった。会報誌から読み取ることのできる、日本国にとっての茶道を試行錯誤してきた家元の活動、また、日本国における天皇家の役割、貞明皇后の進講内容などを考えると、天皇家は茶道の修業によって日本国が求める「日本人」を創ることができるとして解釈したと考えられる。そして、茶道を直接行うことによつて、日本国の

外交にも役立つものと認識したと思われる。

つまり、戦時期における大日本帝国というシステムに、茶道が組み込まれたその瞬間を、最も象徴的に表すのが、秋泉亭茶室の建築なのではないだろうか。

この時代におけるこのような茶道の役割は、その時代のある一面を表しているに過ぎず、また、逆にこのような茶道の読み替えは、茶の湯が含むある一面を表しているのに過ぎないと言える。貞明皇后が戦後、一般の茶会のために所縁のある茶約を自ら選んでお貸しくださったという、心温まるエピソードには、日本国としての茶道の役割から離れたところにあると思われる。

ここでは、時代によつて、茶道に与える役割が様々に試行錯誤され、その当時の社会システムによつて絶えず読み替えられていっているということがわかった。そして、その読み替えが行われたものだけが茶道の実態ではなく、何かしら次にも繋がる魅力的なものが含まれていることがわかった。

(平成一七年七月二三日)

花の伝書にみる「花」と連歌

小林善帆

『仙伝抄』以降、江戸期においても変わっていない。
さらに、江戸中期に入ると花の伝書の条文が、連歌会から歌(詩歌連俳)の会に変わることが多い。またその場合の「花」は、「立花」ではなく「生花」である。歌の会に「生花」が飾られる場合、その季節や歌枕を偲ばせる花材を使用すること、床飾りに障らないような花材やその使い方が望まれている。「立花」にくらべ平易な「生花」はそのことに適した様式であった。「生花」が歌の会に飾られることは、時代が下るにつれて見出され、明治中期『生花独稽古 諸流秘伝』にも見られる。「生花」の流行が「花」を飾る場所やその在り様の選択肢をひろげ、花の伝書の連歌に関する条文を変化させたといえる。
これらのことを踏まえ、今後さらに花の伝書を解き明かしたい。

茶道と恋歌―恋の掛け物をかけるとき

岩井茂樹

お茶の世界の「常識」として語られることの一つに、「掛け物に恋歌はふさわしくない」というものがある。この「常識」の性質と特徴を探るのが本研究の目的である。解析の結

中世後期の古記録や絵巻から、「花」と連

歌・連歌会との密接な関わりが指摘される。一方、花の伝書からもその関連性が見出されるものの、具体的な検討はなされていない。

今回、花の伝書における「花」と連歌・連歌会を考察する上で、対象とした伝書は延べ三二五点。すでに翻刻され刊行された伝書のほか、初出の伝書一二五点を考察対象に加えた。そこからは以下のようなことが見出される。

花の伝書は「花」の技術と理論を伝えるものであるが、その割合はそれぞれ花伝書により異なる。そのなかで連歌の「花」は、元服、出陣、わたまし、祝言など生活習俗の「花」の一端として記されている。

連歌会の設えの「花」は「天神名号、神体を懸けた右の方に花を立てる」ものであったが、それは室町後期『池坊専応口伝』以降江戸期を通じて変わらない。

また、連歌会の「花」は、発句に詠まれた花材を立てることがあった。発句と立てられた「花」の関係は深い。しかし一方でその時に応じたものでよいとされたことも窺える。発句が事前に作られたか否かにもよったであろう。このような発句についてのあり方は、

果、恋歌を禁じている茶書はすべて、千家の流れを汲む流派のものばかりであった。茶会記から恋歌を掛物として用いた茶会を抽出した結果、恋歌を意図的に用いたと思われる茶会が約二〇例見つかった。その内、恋歌を禁止していた千家が恋歌を掛けた三例は、すべて利休追善茶会においてであった。千家が恋歌を掛ける理由の一つに、利休の亡魂追悼、鎮魂の意思があったのではないだろうか。そう考える理由の一つは、江戸時代前期から中期には、利休が「茶道の守神」、「普承相」、「あら人神」になるといった言説が、影響力の強かった茶書内に見出されるし、後期には利休の幽霊が秀吉の前に現れたとする話がひろまっていたこと。そしてもう一つの理由は、それに昔から歌の世界では、恋と述懐は神と人を繋ぐ役割を担ってきたという事実、である。利休の鎮魂、そして利休に対する強い追慕の念。これらが利休追善茶会にのみ恋歌が掛けられた理由ではないか、と考える。

お知らせ

社団法人京都府茶業会議所では、平成十八年度茶学術研究助成事業課題を募集していま

す。日本緑茶に関する科学的研究や茶の歴史的文化的諸事に関する研究等に研究費を助成しようとするもので、対象は大学教員、研究機関研究者、その他研究者や文化人です。応募を希望する委員は、京都府茶業会議所にファックス(〇七七四―二三―九六五―)で助成申請書を請求してください。なお、詳しいことは学会事務局にお問い合わせください。応募受付期間は三月一〇日から五月三一日までです。

例会のご案内

東京例会
本年度第一回の例会を、四月一五日(土)午後二時から東京芸術大学において開催します。

田中秀隆氏「茶文化表象とアジア認識」
東海例会
本年度第一回の例会を、四月二八日(金)午後六時から名古屋文化短期大学アセンブリホールにおいて開催します。

日比野猛氏「尾州千家茶道の記」
竹内順一氏「未定」

高知例会

本年度第一回の例会を、五月二十八日(日)午前一〇時から、高知県立文学館慶雲庵茶室において開催します。内容は茶の湯文化学会の本年度大会の研究発表やシンポジウムで扱われたテーマについて研究討議し、茶事を行うおうとするもので、参加費として五〇〇〇円が必要です。参加を希望される方は、学会事務局までご連絡ください。

後記

*高知での桜の開花のニュースが入ってきました。寒く長かった冬もやっと去っていったようです。美しい春が長く続きますように。

*学会のホームページが更新されました。何度やっても古いページにいつてしまい、困惑することも多かったのですが、今後はそういうことはなくなるそうです。例会の案内もホームページによる方が早く知っていただけると思います。遅れがちだった会報の掲載も急ぎたいと思います。

*本年度の学会の行事はほとんど終わったのですが、可能ならばもう一度研究会を開催

したいと大会研究会担当者は考えているようです。開催する場合郵送でお知らせするのですが、ホームページの方も気をつけていただけると有難く思います。
*来年度の大会の内容についてもほぼ決まりつつあります。次回の理事会で決定することになるかと思えます。

